

Title	メガバンクが採り得る今後の成長戦略：金融コングロマリットの多角化戦略を中心に
Sub Title	
Author	石川, 勝(Ishikawa, Masaru) 小林, 喜一郎(Kobayashi, Kiichiro)
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	2010
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 2010年度経営学 第2497号
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00002010-2497

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

80930053

石川 勝

主査

副査 1

副査 2

小林 喜一郎

中村 洋

井上 光太郎

研究テーマ

メガバンクが採り得る今後の成長戦略
—金融コングロマリットの多角化戦略を中心に—

内容の要旨

金融当局の厳格化や景況感悪化によるコスト増加などリーマン・ショック後のメガバンクの経営環境は厳しい状況が続く。メガバンクの課題は实体经济に円滑な資金供給を果たすことが究極的目標である。これを実現するには、強力な財務基盤を備えることが必要であり、高水準かつ安定的な利益を確保する成長戦略が求められる。本研究の意義は、従来高い収益性を誇ってきた欧米の金融コングロマリットの収益構造を事業多角化などの視点から解明し、メガバンクが今後採り得る成長戦略を実務的に提示することにある。

研究プロセスにおいては多角化戦略に関連する先行研究などを踏まえ、ROE 及び ROE の安定性を向上させる要素を (1) 多角化度、(2) BIS 比率、(3) 資産規模、(4) 預貸金スプレッドおよび (5) 非金利収入割合と仮定し、パネル・データ分析中心の定量分析によって解明した。更に定量的に把握できない要素として、(1) 事業ポートフォリオ戦略、(2) リスク・コントロール、(3) 組織企業文化及び (4) 人事政策を抽出し、4社の事例研究を行った。

定量分析の結果、多角化度や BIS 比率は ROE 及び ROE の安定性には無関係であること、資産規模は却って ROE にマイナスの効果を齎すこと、預貸金スプレッドの拡大は直ちに ROE の向上に結び付かず、クレジット・コストの改善を伴うべきこと、非金利ビジネスのうちトレーディング業務は ROE 向上に資するものの、手数料業務は ROE を押し下げる要因となっていることが解明された。また事例研究の結果、ROE 向上のためには多角化戦略における自らの強みを活かせる事業選択、全社横断的かつリスク・コミュニケーションを重視するリスク管理組織の構築、経営と執行の分離を柱とするコーポレート・ガバナンス改革の重要性、業績連動型報酬の制限適用の有効性などが示唆された。